

ヨーロッパにおけるカワウの保護管理

亀田佳代子（滋賀県立琵琶湖博物館）

カワウ大陸亜種の個体数の変遷

ヨーロッパでも、カワウ個体数は大きく変動しています。西ヨーロッパでは、19世紀以降100年以上にわたりカワウの大陸亜種（ヨーロッパには、日本とは違う2つの亜種が生息している）が徹底的に駆除されました。1900年からは保護されるようになりましたが、1950年から1965年には農薬によるDDTとその代謝物の影響を受けてさらに減少し、1960年代初期には、主な繁殖地（オランダ、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、ポーランド）で合わせて3,500～4,300つがい（7,000～8,600羽）になりました。その後カワウは複数の国々で保護されるようになり、1995年には上記5か国で95,000つがい（190,000羽）にまで達しました（図1）。1990年代初期には、これらの繁殖地では個体数が頭打ちとなりましたが（図2上段）、分布は西ヨーロッパ南部や東部、東欧へと広がり、分布拡大中の地域では今も個体数や繁殖数が増加しています

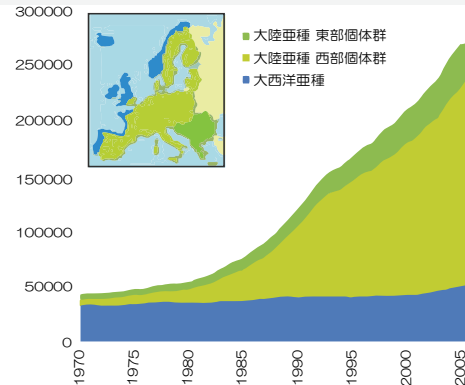


図1. カワウ大西洋亜種（青色部分）と大陸亜種（黄緑色と緑色）の繁殖個体数の変遷

Kohi (2006) and reviewed and updated by Cowx (2013)

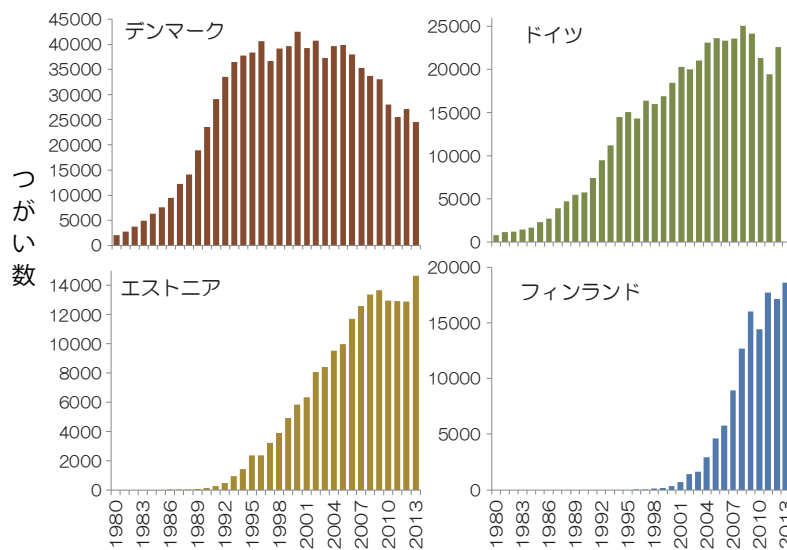


図2. バルト海沿岸諸国のカワウ個体数の変遷

Bregnballe pers.comm., Kieckbusch & Herrmann pers. comm., Herrmann et al. 2012, Rusanen et al. 2012

（図2下段）。

このような個体数と分布の変遷は、徹底的な捕獲と農薬による影響、あわせて生息地の消失が減少の要因、1970～1980年代の法的保護政策、DDTとその代謝物の影響の軽減、富栄養化した浅水域の増加などの採食環境の改善が、その後の広域的な増加の要因と考えられています。

カワウによる漁業被害への対策と体制

大陸亜種の増加により、ヨーロッパでは主に商業的漁業、遊漁、養殖などの漁場でカワウと人との間に軋轢が生じています。カワウ被害への具体的な対策や管理手法は、基本的には日本とほぼ同じです（表1）。

カワウは季節移動を行うため、同じ個体が国を超えて幅広く問題を生じさせる可能

表1.
ヨーロッパでの
カワウ被害への
対策と管理手法

目的	対策・管理
漁場からのカワウの追い払い	・聴覚的・視覚的な妨害物の使用
魚の直接保護	・網やヒモ張り
カワウからみた採食場所の「魅力」減少（魚を捕獲し難くする）	・飛来地付近のねぐら除去 ・魚の人工的避難場所の導入
特定地域での脅しと追い払い	・小規模な銃器捕獲
広域での全体個体数の削減	・新しいねぐら・コロニーの形成阻止 ・徹底的捕獲 ・卵のオイリングなどによる繁殖抑制

表2. ヨーロッパ全域スケールでの漁業被害軽減を目指したプロジェクト

略称	名称と期間	内容
REDCAFE	汎ヨーロッパスケールでのカワウ漁業間の軋轢軽減（2000-2002年）	生物学を基礎とした研究者ネットワーク
INTERCAFE	汎ヨーロッパスケールでのカワウ漁業間の軋轢を軽減するための学際的イニシアチブ（2004-2008年）	自然科学と社会科学の研究者ネットワーク
EU 'CorMan' project	カワウ個体群の持続的保護管理（2011年～）	・ウェブサイトによるカワウ情報の発信 ・ヨーロッパ全域でのカワウカウント ・野鳥保全令の第9条（カワウ捕獲禁止の例外措置条件への適合）に関する手引き書作成

性があり、ヨーロッパでは、漁業被害軽減を目指した広域的な取り組みが行われてきました（表2）。2013年現在実施中のCorManプロジェクトでは、情報の共有と活用を促進するため、インターネットにウェブサイト「EU Cormorant Platform」を構築しています（図3）。ヨーロッパ全域での一斉カウントも実施しており、2012年の繁殖期の調査結果は、上記のウェブサイトや報告書でも公開されています。さらにもう一つ、EUの野鳥保全令で捕獲禁止となっているカワウに対し、捕獲禁止の例外措置条件の適合に関する検討も行われています。

プロジェクトでは、専門家によるコンソーシアムの他、「カワウ関係者連絡グループ（Stakeholders' Liaison Group）」を設置し、さまざまな立場の関係者にもプロジェクトに関わってもらおう仕組みを作っています。このグループには、鳥類保護団体、農業関係団体、釣り団体、内水面漁業関係団体、狩猟団体などが参加しており、ウェブサイトの共同構築作業や情報の提供と共有などを通し、よりよいコミュニケーションと理解を促進することを目指しています。このようにヨーロッパでは、研究者のつながりからカワウや魚の基礎生態の解明や管理技術の開発が行われ、個体数モニタリングでは各地のバードウォッチャーが調査に協力し、ウェブサイト構築を通じてさまざまな立場の関係者間で情報共有と相互理解が進められています。より多くの関係者のつながりへと移っていったヨーロッパの広域的な取り組みの変遷は、関係者が一丸となって取り組むことの大切さを物語っています。ご紹介したのは、国を越えた広域での取り組みですが、都道府県などでの関係者のネットワークづくりにも参考になる事例だと思えます。

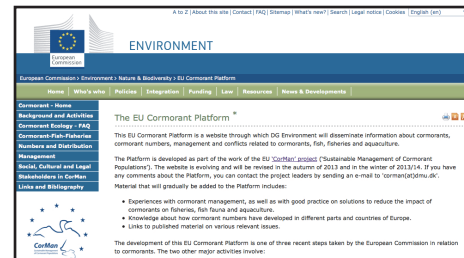


図3. CorManプロジェクトのウェブサイト
「EU Cormorant Platform」
http://ec.europa.eu/environment/nature/cormorants/home_en.htm